

本草家の西洋植物学への関心

矢部 一郎

日本への西洋学術文化の移入を問題にする場合、その時代の最先端の受容を主にすることが多い。しかし、本草学に例をとって見ると、伊藤圭介の『泰西本草名疏』（文政一二年刊）、宇田川榕菴の『植学啓原』（天保五年刊）、飯沼慾齋の『草木図説』（草部は安政三々文久二年刊）が出版されたことが、当時の西洋植物学受容の実際の姿であるとは、決していえないのではなからうか。西洋植物学の影響や受容の状況を適確にとらえるには、先端的なものを知るばかりでなく、当時の本草学の社会一般が、西洋植物学の何に関心をもち、何を理解したかを知らねばならないであろう。

ところで、洋学系本草家は、榕菴、圭介、慾齋のほかには、あまり見かけない。水谷豊文、江馬活堂、野田青葭などが挙げられる。これらの人たちの西洋植物学への関心は、西洋の植物と、その植物についての名物学的関心であ

り、名物学的追求に直接必要な西洋植物学の知識を摂取しようとしていたように思われる。また、西洋植物学の影響を知るには、洋学系本草家のみでなく、伝統的本草家の西洋産植物や西洋植物学への関心などをさぐる必要がある。

曾槃は『成形図説』（文化二年刊）、『西洋名物韻箋』、『西洋草木韻箋』などで、自然物の和漢名にオランダ語名やラテン名を対応させている。岩崎灌園は、ワインマンの本の研究会を宇田川玄真たちとおこない、シーボルトに面会し質問するなどし、『本草図譜』（天保元年刊行開始）に、オランダ語名、ラテン名を入れたりしている。灌園の友人馬場大助は、『遠西舶上画譜』という外国産植物の図譜をつくり、オランダ語名、ラテン名に和漢名を付し、産地等を書いている。曾槃の弟子高木春山は、『本草図説』中にノーゼマンの鳥類図譜の図を入れている。

山本亡羊、榕室の読書室の物産会では、幕末期になると、舶来種の出品も非常に多くなり、出品物にオランダ語名、ラテン名を示し、和漢名を対応させようとしている。また、『蘭山亡羊二先生ドドネウス題名録』には、植物の和漢名が羅列されている。

伝統的本草家たちは、植物分類にかかわることに関心をもった。それは名物学的な関心であり、伝統的本草学としては自然であった。中国本草学渡来以来、日本人は漢名に和名を充てることに熱中してきた。これは日本人にとって必要なことであった。さらに、漢名と和名を正しく対応させることが必要であった。江戸時代に入っても、この作業はより必要であり、さかんにおこなわれた。そこへ、西洋の植物と西洋植物学知識が入ってきたのである。洋学系本草家も伝統的本草家も、大部分の人は、伝統的な関心に従った。

本草家たちは、在来の和漢種にオランダ語名やラテン名を充てようとした。さらに、舶来種のオランダ語名、ラテン名を知ろうとし、それに対応する和漢名を充てようとした。そのために、必要とされる西洋の植物学知識を得ようとした。それは、西洋の植物分類の知識であり、形態学などの知識であった。本草家たちは、蘭書を拠所とし、シーボルトなどに質問し、知識を得ようとした。伝統的本草家は、洋学系本草家たちに知識を求めた。私はこのように推測して見たが、いかがなものであろうか。

西洋植物学への本草家たちの関心は、腊葉標本作成法と植物図の描き方へも向った。そして、西洋植物学の影響は、この方面に色濃く出ている。西洋の腊葉標本作成法は、『厚生新編』、榕菴の『植学独語』・『植学啓原』さらには、嘗百社同人のチラシで紹介された。葉一枚を押葉にした伝統的本草家たちも、幕末期になると、根、茎、葉、花を出来るだけそろえた標本を作るようになったことが、現存する腊葉標本からうかがえるが、残念ながら、現存するものは少ない。

植物図も、西洋植物学の影響から、非常に写実的で科学的な図となって行った。榕菴の描いた植物図も、後になるほど立派なものになって行く。西洋植物学と西洋植物学書の図の影響であろう。洋学系本草家による植物図ばかりでなく、伝統的本草家の植物図についても、そのことはいえるのではないかと思われる。小野蘭山たちの『花彙』（宝暦九年刊行）の図は科学的植物図と評価されている。馬場大介、岩崎灌園、高木春山たちの図も立派である。灌園や春山は、図を大いに重視し、灌園は、図があれば解説文はいらないとまでいっている。

(立正大学教養部)